歌合
建保二年
同四年八月廿二日

建保二年八月十六日　内裏歌合
同　四年八月廿二日　歌合　当座
同　年同月廿四日　歌合　当座

特別
ヘ4
8073
1

二部之中
甲

へ4
8073
2

<96-351>

小川壽一藏書

内裏歌合

建保二年八月十六日

題

秋風　秋露　秋月
秋雨　秋鷹　秋虫
秋鹿　秋花　秋水
秋霜　秋祝　秋旅
秋恋　秋懐　秋雑

作者

順徳院

女房　　僧正

権大納言源朝臣通具　参議藤原朝臣定家

大蔵卿藤原朝臣有家　宮内卿藤原朝臣家隆

左近衛権中将藤原朝臣雅経　丹後守藤原朝臣範宗

侍従藤原朝臣光家　皇太后宮大夫俊成卿女

講師

読師

判者　参議藤原朝臣定家

一番　秋風

左　持　定家卿

おきまよふ民の苫屋にはこせかよふあひく思ひの秋の初風

右　有家卿

あはれさはいつも秋風にかはりてなけにも風のをとそれ

左の民の苫屋の秋風より右のひき縮の花に吹よせ

おかしくもさしたる事もなきにしもあらねは

右の音はさひしさは侍れと一番の左に任せり

しからて侍れともゝ持として

二番

左　勝　女房

よやこのほとにしけき秋のまつしひしくなる秋のゆふくれ

右　俊成卿女

萩の葉にふくよりあはれは吹風の秋のせみしもとそ

きゝかよふしきね思ふひとよねかひと侍るとはさえんよ

おかしくきこえ侍るは始のみえ字て秋の初風は

よろしくきこえ侍りてやときこえ侍るたえよくあはれな

と申事なれとも人しくはれ侍らは吹きたてゝまつ持つ

あらしはふかくしききこえたえ侍らね大方にとめて

勝とする

三番

左　持　家隆朝臣

さしてくとはかりそれたちまちにしてくる秋とて秋風そ吹

右　雅経朝臣

いはまくれ萩の下葉もいろ見えてつゆそそくれ秋かせそ吹
人をとふれとたのまぬとくらへ秋しくにあるといふをと
よろしくきこえ侍るはまつゆのかそれ秋かせそふを
勝へくや侍ら猶もとにもよろしき持や侍らん

三番

左 勝 僧正

うちなひきまきはの秋のゆふへ秋やくると山よりそつけきぬる風

右 通具卿

露は宮には袖をもとねあへとぬき草やまの秋まかせ風
あはれなりとやいつもかはおもひてまさは秋のゆふ
秋やくるとをはねに山しらくるとありてくゝ見て侍れ
くまなし秋のてしはゆふさまよ侍れと判は左為勝

五番

左 持 経宗朝臣

ひとりぬるつま結秋の夜のまに風のをとはくるかさゝきもなし

右 光家

うつりゆく草葉につけて秋風の色はさやかにみえぬ秋かな
左の哥もよろしき 仍為持

六番 秋露

左 持 家隆朝臣

をしみかね袖のなかにやとりてもおもひく秋の夜てらす

右 通具卿

露の野はをくあさちかすへてゆふくれの夜とつくる魂
きのふともをしみかね袖の中にもやとりてそらのはて

けふのみとおもへはくるゝもをしきをひとつなき海しほく
へしつやうおもひいや更にかつくゆらん左方
も尤にみれ野とあさらかにつくとかつかりぬく
こたいひくつきせてゆまてとけ左の方ハれもさう
たききさ海さやゆらん

七番

左　縁

秋きぬと風のおとにやおとろかんひろけし袖にむすふしら露　信正

右　光家

まつよりの夕つくひしもうつりきて袖しるしも萩の夕露
さこひろ袖もしむしとをれしと袖にこそ露のりく
まうしにあきやうにたかりしろく見ししゆらつて左方

まよりの夕けくらけるかみのけしきこしゆるは
しよ以左方縁

八番

左　為　女房

夜山風のかのいかなるこゝろにか我衣手に萩のしつゝ

右　範宗朝臣

萩にふる夕くれかたの風にそよき袖にたちかゝる影のうつる
さらにこの露のさまにえんなるかたちみゆ左かちぬへし
もおもしろきをやゆらん

九番

左　宮内卿

神やしろ神さひわたるかみのあらしに...

右 勝　　　雅経朝臣

とをさとの萩の風よりあき風の人にもつけて袖の夕露

されと左のふかきこゝろかさねたるを此ふしかくを

めつらしきことにもあらねはさせることなくて勝とし

十番

左 勝　　　有家朝臣

夕されは野もせにをく白露のこほれかゝりて枕風そふく

右　　　俊成卿女

あとりの露とつゆはあくさめとも我袖しめりおとる秋

きたまれなりてにをはいとありかたくおもしろくき

こえしをみれ左もわろくはなけれといつくしきかたにこそ

まさりや侍らんなむ右を勝とし侍へし

十一番 秋月

左 勝　　　雅経朝臣

たえゝは秋の夜すからの枕にもあかしはてけむ山のはの月

右　　　女房

あまつ空うらしる風そのゆくえやのあるへききよくて月もまる

左はことにあやしくいひくるまれて侍るにて左さうし

風ありしをあまねく侍るむとも見えぬ右ほとは

くたれたきからんやとて侍らん

十二番

左 勝　　　通具朝臣

秋はまたうきを袖につゆかゝりはれぬ月のかけのさやけさ

右　　　範宗朝臣

ゆふくれ雲とはれし秋風のよりふけゆく山のはの月
さしうきくもし神しるといへり思ひいれてよむや右も
心あるさまにはみえ侍れとことに法かといふへく
山のはにてもや侍らへしん仍左の勝

十二番

左 勝　　家隆朝臣

あくかれてやとゝいふてよのこのさとも我家をは月しめれつつ

右　　定家

いつはりのならぬ秋のやま人も見ておもふく月の影かな
左の哥優なるさまに侍れは左の勝

十三番

左 勝　　俊恵

うきくものみちなきみねも明ともなき月のかけそやとれる

右　　俊成卿女

君と秋と月とひとりこゝろの秋のかけはしてくもりなきを
さえそひたるはさまのとゝるこゝにしに侍りて右君こそ
秋とはのへしれ侍るとこそおほえ侍れとけて申なり
へんしいかゝ侍らん侍りける猶は右の勝

十五番

左 勝　　有家朝臣

月みてもわかよはかきてもくるしさをあまのくもゝせ秋のゆふへ

右　　光家

久かたのきよき秋の月やせし月見えとみゆるこゝろし
ありあけのよるしくやまきうしくあはれときこえし

ゆふくれ大そら見月をまつしもあきさへてはなさと
ふかくつきてゆく久なれとかなひてや
ゆふしんのたの縁

十六番　秋雨

左　勝　　　俳正

いとゞまた月まつよなかはあさぢふにおとくるゝ秋の村雨

右　　　雅煙斜氏

風さそふそりのおとたにたえて宮ゐする松の村雨

右の空階雨滴落葉窓深といへる詩ハ
まふかく思ひもしられて心あるさまにゆれたれとも
左は月まつよのあさぢふにとありてそへん
よきこしゆれいおなしかたの事にや侍らん

十七番

左　　　宗家

萩かあれ夜のをしさそふ風しは野きらしきひく秋のゆふ雨

右　勝　　　通具

人はこなくいる夜庭のさびしきのおとたえぬ雨の夜のさびしけれ
さ夜のなきまさしすといへる事ときこえし
あやしげん大雨滴梧桐山館秋といふ景気り
よりてゆふまやゆふ雨のおもいかにもやしくきこし侍る
まはの縁

十八番

左　縁　　　宮隆朝臣

松はまた折しれ木のくちまさくてきつゝまつぬよゝの村雨

右　　　　　　範宗朝臣

野まく一葉つゝおちそめて秋しる宿のつまき色は
左ゝ明ゝ事ハ侍らぬといひまりてきこえ侍く
まや右ハ優に侍るを落葉なとしるまりて侍
さやさしく侍れやきこえ侍れきこえまうく
なるとまうしくきこえ侍れは以右為勝

十九番

左　持　　　　　女房

宮木野ゝこゝろにかゝるやうらみ風しきまく秋のむしのね

右　　　　　有家朝臣

くしのあくる夕暮の秋のしたおるゝくるゝのゝ草
宮木のゝ木の下露優しくきこえ侍るとふくれの

うきまやさしくにかひくきこえて葉も見ゆるかたも
侍れとも為持

二十番

左　　　　　光家

しられぬやたまさかきは秋の色のかはらぬつきよりみゆれ村雨

右　勝　　　　俊成卿女

風まさる空にうつろふ村雨のぬかりの床の玉ゝ
松の色のかはらぬつきとつけたまへしとしきに
ゆかしきやまさこし侍れ左のいつらひまくみえね
まことにしかりつきにたゆまうくしく侍しきおと
名のかはらぬまると嫌侍しきらん

廿一番　秋鴈

左　　　　　　　　　　後徳閣下女

松風の秋はいつともきこえねとわきて荻の葉のさやくなるかな

右　勝　　　　　　　家隆卿

明かたの月こそ残れやあけぬ覧花しらむ空の月影

左の荻の葉いとくありつきてや侍らん右の夕

まさるこの葉みえあしひ侍らす花ゆかしさ

こくましく侍りより花しらむすくれいと

おかしくきこえ侍れは勝とす

廿二番

左　勝　　　　　　　女房

たゝあはれ秋風のおとて後そおとつれきつゝのこゑ

右　　　　　　　　　通光

秋ふけぬよるしかりかねの雲やさむしやさとりさへ鳴く

右の哥かりかねやとりさへなんといはれてことに

きこえ侍れと左はいやしく侍れは勝つくや侍らん

廿三番

左　　　　　　　　　宮内卿

こゑたつの原の紅葉のうへにはきえしらさねの雲風

右　勝　　　　　　　俊成

夜をかけの夕くれを空にまかせて霞をまねくあをあらし

左の紅葉の色つくりてみる松風の音とやへくや

侍らん右の夕くれを空にまかせてこそひ霞をとさうたにあらはれ

さりなから勝にいかくおかしく侍れはたちみる勝

廿四番

左　持　　　　　　　　能宗朝臣

山人のたちさかえぬる花の香の衣にしみかへらぬ秋さかり

右　　　　　　　有家朝臣

秋風の聲にまかひてしらつゆのちるとそみゆる澤のはしまゆ

なかむかしに涙のいろを花ころもの枕とはしのかひもなくてすき

なきひとのすかたの庭のしたもとはおもひゆかへしれ

て山花にゆかりやあるのつゆさとしいきこえとやゆく

むたされなとたのむれさりしあまた風にさそひてこし

ちらしめくらしつくやゆくへしきおもふす

二十五番

左　勝　　　　　雅経朝臣

あきはきのさかりの後やさくらんとゝひしかりしひとしもやしの

右　　　　　　　　　　　光家

たつた山ふもとの紅葉やこすゑの秋のいろを錦

たのもしくもみつ袖とふりかへりてはいとゝなみたくそ

ゆふかせにたえこそ秋の霜さむしゆふつけ鳥

さはのこゑはいつまてしるへもかなかひしやゆく

むしたつこゑはかたつけるもしらへてゆくらや

廿六番　秋虫

ゆくへたえ勝

左　持　　　　　女房

秋の野の露のまかきに風のくしあはれさそふ虫の聲を

右　　　　　　　　　　　　　　くにあきて

秋の虫よはるこそ野への尾花もあやしくものいはむかたつ

秋の野らせにあるかきりの虫の音さへきこえ侍しめ
きこゆる野辺よりかくれぬあやしとかりはきこえし
侍れとも是は姨艷にたいしとかりうるひて侍れは持と
や申へく侍らん

二十七番

左 勝　　信正

くさむらのあたりまつ虫のきりきりすつゝりさしおもやすらん

右　　家隆朝臣

野もやましきさよのねぬ枕のきりきりすとやわれとゆひさためはさゝへ

おもしろ新たなりしにほひくちゝつく虫の音おもしろし新しと
おもしくきこえ侍れとそれはいひかけたる家の名あは
やさしきまけしやあらし侍へし

廿八番

左 勝　　通具卿

露はらひあきのはらにて何かりくさの色のうつりかゝれと秋風のふく

右　　光家

秋はなほあさちか原のにはのをのかれゆく虫のねのこゑ侍らん

思ふ秋やと秋の夕くれのまゝ優しく侍れは勝と申侍るへし

廿九番

左 持　　雅経朝臣

月影はうつる野原のあくまて虫の音のきりきりすや宿の宿

右　　能宗朝臣

松虫の音をとひくて秋の野はなにつれ庭のまつはさそ
あそれなきまさかたる判侍しめはおもしろきの事しや

持しん

三十番

左　　　　　　　　　　　　　宮内卿

あさりし思ひかへし河よりきふゝ昔わりとて松虫の声

右　勝　　　　　　　　　　　俊成卿女

うつゝなれやしつゝふ雲の上よりかゝるみやのうちくれ

おなしさとのよりゆくかたれと達し云ふ左ハ歌

まさりてや侍らん

三十一番

左　勝　秋庭　　　　　　　　女房

みよし野の山ま(て)みるかすてふ庭の色かはるき暁の露

右　　　　　　　　　　　　　家隆朝臣

さのひあけりおもひやくはれ身おもひのことふかくして庭そよる
あきの庭の山下もりけてあくしれとはへるを
今おもし侍し侍れも勝とやいへくや侍らん

三十二番

左　勝　　　　　　　　　　　通具卿

音たてゝかつひとつやせくるゝ庭のしもの色をかへつゝ

右　　　　　　　　　　　　　雅経朝臣

とふ人も山のまつかせ庭のおとつれ垣の夕くれ
秋ふきと秋の夕暮といふことはやさしく侍れと
音にふくわれのひとしきあらさ侍れはおとるにや侍らん

三十三番

左　　　　　　　　　　　　　光家

なかりし床ハあさちふ露霜おきて床しまある此ねさめかな

右　勝　　有家朝臣

あさちふの夜はの草むらしられけん人やいとふとなきしよわる

色かはる床きこえゆかしき虫の声ならぬ此事なりけり

此夜の草むらもかれていとよはしくきこえし

侍れは勝と申へし

三十四番

左　勝　　範宗朝臣

時しもあれ秋になりてさ山しけりの秋の夕の秋そへしなれん

右　　俊成卿女

何となき身の契りの床の袖よ夕もつきせぬ雲のかなしきそ

床のちきり秋の夕かなしかへはれとれしは

床しきいひたりてかなしくや侍れは勝と申て

三十五番

左　勝　　僧正

秋山の梢は秋ゆく末の秋をあふこころのほかまても夕暮の空

右　　宮内卿

紅葉うつろひゆく鹿のなく音きく此秋の山かけ

なれしくて鳴くきこえ侍れは右を勝とす

三十六番

左　持　　秋花　　女房

袖の色は露の色さへうつろひて萩も萩の花の色

右　　僧正

さをしかの花の野の萩の葉さやかにしつくやかなしき

あきかせに待しきこえゆれてゆらす

三十七番

左

旅衣ひもとく萩の色くさにかさねしよのあさし朝露

右勝　俊成卿女

ぬれてほす袖よりあまる秋露の色にいてぬる秋の萩かもとより
きえぬ露のむしんしよりてあさしの朝露とつけ
うちみたれひてやきこえゆれてたれのとさまあ
てよの中へゆれん待しゆれいらるとも

三十八番

左勝　西行て

おしるへつつみ露しこえ秋の夕のあきの色にしらし秋とそいはん

右　光家

こ萩さくもとあり夜のつゆひぬめむの後や袖のあきらか
なるまて心しゆしよのちまて朝露ならしん
しとまふとゆふかたあき萩の末を秋とふいつれかそ
いつぞの日もく花のねなしにとゆふかたしくき
あらしゆれてもみち勝

三十九番

左　家隆朝臣

あかくし吹へてましつきてかくれぬ露の宿とせまきの萩

右勝　雅宗朝臣

風ふけば月かそえそて海ての袖に萩の花もとより
たかくしきさ海しゆれとそうしきかれてゆるせ

右ハうつしからましても明くれ袖なとはいつれも
めつらしく優にやさしく侍れハ勝とし

四十番

左　　　　　　　　　　　　　有家朝臣

朝露し萩の下葉にけふしきえもさらに野への夕暮

右　勝　　　　　　　　　　　雅経朝臣

秋風にさそはれちらぬ露をけさ袖にやとしてうつる萩はら

左のうけかりしを野へてとはゝしをれ侍るにや右の袖
まさなくまさつる萩原いとやさしく侍れハ右勝

四十一番　　秋水

左　勝　　　　　　　　　　　僧正

龍田川うつる紅葉のちらぬまは水をもにしきにおりかへてや

右　　　　　　　　　　　　　範宗朝臣

やまもとて流るゝ川の秋山の紅葉ちりしく岩のした水

いつれとわきかたくいつれもおもしろく侍れハ
侍れハ勝とす

四十二番

左　勝　　　　　　　　　　　家隆朝臣

山風の吹のまに〳〵ちる紅葉大井の水のせきもとゝめて

右　　　　　　　　　　　　　定家朝臣

大井川せきもかへらぬひとつ紅葉のいろの山のはなせ

大井河のせきハかへつてあまりくりしくや侍らん左勝
新古今にいれたるいとやさしく勝へきにや

四十三番

左　勝　　　通具卿

おもひしるくたれかの秋をさそひをすゝぬるやなけかん

右　　　定家

あはれつゝ涙もさそふ秋の風しらすて秋のいろなるやとふ

なかめてや秋のいろなるやとをふかくやなけかんたれは

左はくるしきつゝきにしきこえ侍れはたる勝

卅四番

左　　　宮内卿

秋風のつゆさそひゆく音のうへもしきうらめくしくれぬる山のは

右　勝　　　雅経朝臣

さらぬは露のあはれのうけみて袖もかはく秋の袖つゆせ

うら冬かれきかれぬにはつきを別しきもしく侍らぬ

むかしとおもへし

卅五番

左　勝　　　女房

人くまゐかはりぬる世の宮をかなしきくせなむかしのありけり

右　　　俊成卿女

あくかる山路やいとく大ぬはうらやまへに秋のゆふ月を

あはれのかりとみえにしかすきこしゆふかれたるのお

卅六番

左　勝　　　女房

秋霧

かきらぬ冬のうらみ姉しけきし冬露のたえゆく物もし秋せかれせ

右　　　定家

よる露のかゝるこそ山からうつろひぬ秋の木のしたのおもかけにたつ

秋葉のかりこの中にひきそへてつゝしくおもし
くきこえ侍れともいたみ持

廿七番

左　持　　　　僧正

さをしかの妻ふかくハ露ちらしめくるまつ秋風

右　　　　　　俊成女

風あらみふるさとうつる袖の月の露の枕し秋をしらせて

袖の月の露の枕えんよはきこし侍れとしめやかに
侍るめりや妻とふならハ露おきてるといへれとよ
ろしく侍れと持侍るへし

廿八番

左　　　　　　家隆朝臣

しらぬまの萩か花ちるまよひそむ秋の袖露

右　勝　　　　雅経朝臣

秋もまたしらぬハあはしのとこの袖かへる山の嵐の袖露

左のさそひ露あくいひたりてハきこえ侍るとなれとハ
あらしの心を上句とて侍るやおもし袖露にえん
小さこし侍れとも勝

廿九番

左　　　　　　定家朝臣

秋の色のしかの聲への露とうつをかけし草のうへハ露そ

右　持　　　　有家朝臣

露まろくをかのいほりさゝ枕一声し秋の来とやましろ

左のうたけかし草をつゝみにもあく侍るへしむさし

枕一夜の秋よせるなし袖かひ給ひ侍らぬへし

五十番

左 勝　　通具卿

ゆきかへるあきの風よりひしく露さへくまなさてありけりあさまなき哉

右　　花京部作

山里は宮よりさきにをしひ来まつ露ちれの夕月のてらし

左は万葉の古風をこひねかひ右は九秋の霊月をあはれふ姿ともにかはりて侍れと各相当てなすとも

勝負はしかたく候かれおもてや侍らん

五十一番　秋祝

左 勝　　有家卿

君か代はよろつの秋をせめてすゑひさしかれ野への苧まし

右　　俊成

君か代へんよりひさしくよろつ代とさすく田のほとも我かやし

高砂の花の山の姿いつれとなくかれはおとけ

五十二番

左 勝　　宮内卿

山のはしきをあらせと世かはあてよの秋つさとしまつのも

右　　花京部作

菊の花君かあきは長月のつぬかしにけかえつしへて

左の手しかりちともなく左ところし争懐しや侍らん

これも不の明

五十三番

左　　女房

いまそ見ハひさしき世々に神さひし山の端の夜の月

右　勝　　高隆朝臣

君か代の千とせの松をあるしにてよろつ代の時雨しらぬ松かえ

たえせぬ影あるハ庭と大内よりの時雨しのふ家

松かえ松かしらてハまへし侍れハ勝とす

五十四番

左　　光家

千代の松けひさしかれとて植えし松やさしき時代の松色

右　勝　　通具朝臣

君か代ハちとせの松風まさりつゝ松のかす人のいのりあてゝ

大千代の松時代の松風君のことゝ世のかすあまた

よろつあへしほにて松の影まさるへしとて

古の言かはらぬへくや

五十五番

左　持　　雅経朝臣

祈りせやこゝしきすそ時の君ちとせの松の色ハつきせし

右　　俊成卿女

あめつちのひらけし神のみよゝりもちとせの松はうつりあらぬ

左ハ深し右ハちらしいれて侍れハ同様にや

やつくりしん

五十六番　　秋徐

左　　定家朝臣

あつまてハ生まとふりの君の代の影くもりなき君か代の空

右　勝　　家隆朝臣

草しあるあかゝらの歌はちかひしそやはなれしく
ゆふさりはよ山よりよめる事も侍しを
えあらしあつるよはいかしくきこえ侍れは為勝

五十七番

左 勝　　通具卿

都より神よしくしくれあへすあへぬ宮山なくて

右　　雅経朝臣

月よすなさやの中山あらくしらに面影の秋のつきさし

面影しあへぬ吉野山夕霧なといひ古今のさや
の中山あらくもとよりて本歌の心につれしおりて
不得れは勝負やつくやはへらん

五十八番

左 勝　　女房

ふるさとはよもすからしさの関のまはゆくの秋のよな霜

右　　範宗朝臣

あつまちやおしゆく山もゆつるあき都もしらやおもかけ

ひれのく関門の秋の夕霧をきこえよきこえ侍ると申せ
ゆくらの山のこのつくとよてしるやこれの関屋とおしつくんとや
よあつしくいはれねとよつくに侍れはおとすや侍らん

五十九番

左　　定家朝臣

うらふあや称なの夏の秋風しもむかれ行つちまての衣

右 勝　　保季朝臣

えうちえなはらよいつとよてなのむらつまかくしき秋風の頃

たのもしなのまつかえ侍りけり秋風あやてもあひ
見くさ物しや侍らん白露の色をかへすあはれとあつて
しくはりなくきこえ侍らずかへて勝とて

六十番

左 持　　有家朝臣

左てのかやくさみてにこゝや秋の風のふきなかり

右　　俊成卿女

あきの夜やさむくなれとれなかし　あさ波の山はあさき音の色
さゝわけつゝや秋風きこし車あさくや侍らん左勝
さらされともこのぬくらし侍れ同様や侍らん

六十一番

左 勝　　秋立　　女房

又ゆふぐれや風ハ音の嵐の露ありしまゝにぬ人乃心し

右　　定家朝臣

あはれともふりしかの堤こゝろとて秋やいかなる人のしたに
風ハむくしの秋のうかえんておもしくみし侍れハ為勝

六十二番

左 持　　光家

まけくきし晴ともふけて白露のおきて人まつやまの秋かせ

右　　俊成卿女

南引ハちぬのしまかれしものさゝにまよふ茎つゝ秋の色は
いふかの事みえ侍りて勝負いふか明

六十三番

左 持　　通具卿

なうしれか宿やかりつゝ今こんのまゆのつきをも月そうつしけり

右　　有家朝臣

あらしふく秋の野風はいはふしゆふてにあきの宮の通路

まつかつき掃しけつの月とうしき宮ののそひら

あさ氷とたつふいつまてとしるへやけふん

六十四番

左　勝　　俊恵

さみにかやりさ宿のきをしののこほりそ有明のあと

右　　雅経朝臣

ゆむらたえりしつもれの入るもかりとの宿の雲

さら衣とりしえんしよまやしくさこえりつとたの風

むらさめふろしあかしもしくさこしゆかれくれれ

左勝とて

六十五番

左　　有家朝臣

よそにさへたもとの袖の露をたまうつきなかしひの秋の夕暮

右　勝　　範宗朝臣

かはへさそあきにはあまつ様ならわれならしもつゝ

さらし傷むし待まてたいかにはよそにしくさこしね

まは勝よ待つへくや

六十六番　　秋懐

左　　女房

煤しあき月に宿のあけて昔をいまふ思ひかねつゝ

右　　雅経朝臣

まことにさらし給ふとハいふ此秋の夜の月十五夜を詠して
左事の心へ給ふ依失をうけ為ってハ是此
まへにうく給れ左をとかうにいひなし
て給り勝負ハつれともうくや給はん

六十七番

左 勝　　僧正

今宵しはあかし夜をこそいでてハ露の命ハ君ゆゑ

右　　家隆朝臣

いはくふる男とハやとさへかりぬる出雲しられぬとてはよ
おのきもしらずいとよろしくきこえ給ふとたき
むまれとをきて露のいのちと侍れこそかた
はく侍れハ勝侍べし

六十八番

左 勝　　能宗朝臣

まてやしめまめ桔梗年をへておつる涙の数ちらひめかハ

右　　俊頼女

あはいとふれやちぎりかつ風のまゝもとさけつ乾く袖
たまさしくきこえてあはれもなくしてきこゆあはれ
侍れ左も俊よりハ侍しめとくらべきこえたるとまさに
もうけてきこし侍れハ左の勝

六十九番

左 勝　　有家朝臣

うちむこんさいふつるつりまさる男をまつ為の秋の夕暮れ

右　　定家朝臣

花か世はあかれぬ末の露かれしよるはむかしの月の光
右者尤よろし左の哥もなをめつらしくきこゆ
尚遠舎なりや侍らん年まかりて侍る作者勝侍るも

七十番

左　勝　通具卿

秋さむくふきそめぬるしの風よりも枕に昔の夢のかよひ路

右　光家

うれぬとも枕からてよきりこそあれもいまは枕の上そと
たいあれもいまはかれるといつ頃つ秋の雨のよかな
ぬれやはらんたゝ侍るへきさ侍しいひあまされたく
侍れは勝侍るへし

七十一番　秋雑

左　宮内卿

ちとせ海や秋さん花葉の風にふかけしほれて鳴そ入の海

右　持　雅宗朝臣

時雨れし川野浦の秋風に晴はつゆさやかに人もあらはれん
右は心もとよろしくみえ侍るあはれの勝

七十二番

左　持　女房

さきの松しまもれし月いまひとりのおのへの露やひかりそふらん

右　保忠

よし野山さけふ露ふかき霞れはけれはあまつくりのはかなく
たかさこの嶺のはるかに見る宮のちきり　松かねの松
にみかよふとて持し侍るへし

七十三番

左　持　　　　　　　　　　通具卿

秋きぬとおもひもあへぬ夕暮の秋の月影てらしさゝらなん

右　　　　　　　　　　　　有家朝臣

人とはゞまれにあふ夜もたのしけてうき山の秋ところてん

たのしき夜をや物のふ思ひけんたいつ

ふく山の秋ところてん優しきこし侍れ勝負

不分明

七十四番

左　勝　　　　　　　　　　雅経朝臣

萩の花をとりつゝしく深山の露をとて吹るゝ秋ところてん

右　　　　　　　　　　　　光家

吹まよふ萩乃上葉に世にしらぬ袖の露かな

たのみいとよろしく侍れども大の世ことゝ

きこえ侍しぬうへしこは世よにしらぬといつくみくら

まくきこし侍れを勝れたる勝

七十五番

左　勝　　　　　　　　　　家隆朝臣

嵐ふく野辺の萩枝露さそふ風もしらぬ秋の夕暮

右　　　　　　　　　　　　俊成卿女

荻ふく風のつきぬし秋の月とふ袖し露やさらに

たゝれもよろしにきこし侍るうへ

またよはぬ袖し露やさらんといつくらんなる

ならや侍らんおかつるむまでいかゞけまとも

左おもハれてきこしめされハ勝給へし

女房　勝六首　持八首　負二首

通具卿　勝七首　持六首　負二首

有家朝臣　勝六首　持六首　負三首

雅経朝臣　勝七首　持七首　負一首

光家　勝　持一首　負十四首

僧正行意　勝十一首　持四首

定家卿　持二首　負十二首

家隆朝臣　勝八首　持二首　負六首

範宗朝臣　勝十六首　持十六首　負三首

俊成卿女　勝三首　持六首　負七首

此外二首ハ家隆有家後宿老の勝也見へし

歌合　建保四年八月廿二日當座

題　桐葉　夕擣衣　深山霧
　　覊中恋　海邊恋

作者

左

女房　實氏卿
頼範卿　經通卿
保季朝臣　經高朝臣
家宣朝臣　經兼
資隆

右

家衡卿　兵衛内侍
雅清朝臣　知家朝臣
範基朝臣　能宗朝臣
行能　信實
藤康光

衆儀判　隠名如恒

一番　朝落葉

左　勝　女房

横雲ハ明はなれゆく山のはにおちかゝるらし嵐そ吹

右　兵衛内侍

よわりはつ時雨ばかりかゝる木末ハつもりつゝ森の下草

左為勝

二番

左　持　実氏

朝なく時雨の露しもかへて秋ふかくみえまさるみの杜

右　範宗

かくれぬのうき世の山のこのはえに紅葉かけてちらす風

為持

三番

左　持　経通

冬まちかまさに嵐のはてつゝ朝霜よもの山の紅葉をちらしゆく

右　家衡

あら秋さす八しほの色の明日ちらつゝ冬ハむかしの紅葉なりけり

右前歌常や例為持

四番

左　持　頼範

秋の冬まちかる紅葉の色かきて朝霜に散る嵐ハりちらし

右　雅清

紅日影ハ山や嵐の吹紅葉ちらしみるをしぐれやたゝみ

為持

五番

左 持

色かはる梢ハ家ちかき紅葉ハいかにして秋日のさすや思ふて　保孝

右

秋田山時雨さそひし色にしてあさらの紅葉色こしくなる　行純

持

六番

左 持

三室山紅葉をめくる胡家のさとゝふつけく嵐の松風　経高

右

峯のうへしとあくつゝさけの山の紅葉こそのくうつろふ松の村雨　知家

左右共無指事　仍為持

七番

左 持

たつた山松の梢の紅葉とりて出るやあさ日の風しもそん　家宣

右

見るまゝに色まさりゆくかきしたひ紅葉しうつろひあへぬ嵐の紅葉

行実

左右共無指事　仍為持

八番

左

秋ふかくめくる錦を立田山いくしほか家のよそめしらしん　経通

右 勝

明日香河錦をまかへ紅葉のちるの名にあらしもあらしかし　能基

右可為勝

九番

左 勝　資隆

露霜の色にはきしもみえて朝日にさそふ庭の秋萩

右　康光

ときはなる松の緑とみませて時雨に秋のこゝろありとは

左哥色よろしきよし申仍左為勝

十番　夕擣衣

左 勝　女房

松風も夕やさしくかねならしさとのあさなあさなさ衣

右　能宗

宇治よとふさけれはあれはしの夕嵐にはるかにひくつら嶋

さらに哥の優也左哥つられ言くしとして仍左為勝

十一番

左　実氏

夜もさむし川とく霜やおきつらんよもすがらうちあさきさ衣

右 勝　兵衛佐

くるゝよりよさむの声もしらしらし月になくあさきぬさる

仍右為勝

十二番

左　経通

はるかなるよそよりもきこゆる夕さゝ嵐につけて衣うつなり

右 勝　康光

夕日さす思への庭にしられ候て秋来になりともつらん

左歌有病仍右為勝

十三番

左　　頼範

夕されはひさけや君かまつのうら風さむくしく衣うつ也

右　勝　　家衡

夕霧はへたつる林かせをこしにて秋さむしのの衣うつ也

左哥の景左勝く以右為勝

十四番

左　勝　　保季

あけぬとも八重しけらむかしら露のさ衣うつなる

右　　信実

あらいて夕霧みなかむしそきくとは馬もなく衣うつ也

左歌のりしあはれなる字ふあひかなく可為勝

十五番

左　　隆房

たか里の中絶し人をまつよりもことよせてこそ衣うつなれ

右　勝　　雅清

よそにきく夕風にいはせこうしくもつらしく衣うつ也

左猶しきく右も過失仍以右為勝

十六番

左　持　　家宣

とをつころ風にあきのかそことわりの末もあきの枕の夕さむ

右　　能基

秋風の袖よ涼しきつきかけの月に絶えしき川衣うつ哉

左哥まぬかはらまてに言あらそひや左文

夕のゝいろくらへかたくてや持

十七番

左　經通

夕風のいくつまつはさひしさはいくさらそ志賀のさと

右　勝　行能

三つあまりよいかゝきるありしむかうつらぬ山の端の夕くれ

左哥其詞おさなしとて以右為勝

十八番

左　資隆

志賀のみ麻のさ衣うつこゑかたりすくれたれやとおもひてく

右　勝　知家

なきてし秋ハつれ夕暮をいとひたなきしき衣うら

左歌ハ心へ常事く右哥ハ文字劣とて右為勝

十九番　深山霧

左　勝　女房

秋の葉のつきぬきえもなかりけり秋の深山の夕霧の空

右　家衡

宮こにハ深山のおく河瀬の色やまさるつゆそたつ

左哥ハ優さある心以為勝

廿番

左　勝　實氏

しらくもの山路はるかに出かけて行てけり秋の旅人

右　知家

さよ川風や山路のひとりしに夕霧て夕暮るるひく秋のいせ

左大臣殿のうたあはせ

廿一番

左 持　　師通

いつくとも しひまさけん山深く雲まよふ花のかをりてよ

右　　能定

あくれはちくさの色もよのつねの雲のうへなる山のおく

さらなれやうた持

廿二番

左 勝　　教能

友よりふかくこゆる人の影ともに朝たちこえて雲の中山

右　　能基

あき雲はさつきの山をゆけは袖しくれ夏よりかなし白露

右の哥は雲の中山たかき雲の中山の當番歟残

れたの勝

廿三番

左 持　　保季

雲ふかく比良やまさくらもしらぬ康はれぬよの月ならてやさしとおもふ

右　　康光

まれなれは月の出もいるふかく雲にかくれて霞むかも

たえて左歌都とて共に持

廿四番

左 勝　　俊高

あきの袖よりかけてたのむつきれたる海のおくの雲の夕

右　　行能

みよしのや山さき山の山人の足もいかゞ袖の秋なり
左尤為勝
廿五番
左 持　家宣
山風の柴もあはれを深き夕暮に心しるゝ音ぞきこゆる
右　雅清
まきのへのかゝるあとしらぬ山深きうへにまでも雲ぞ結ぼれて
さしたる為持
廿六番
左 持　經蓮
夜ぞふかみ山路も遠き夕暮に庵の秋さへつゆまさりぬる
右　無名内侍

深山べやいかにあはれを海さへも人やよりつく風のあさ霧
左右共ゝ無指事よりて為持
廿七番
左　資隆
山人のものの秋もありてそらもしらるゝのあくる霧のまとゐ
右 勝　信實
深き夜は山かげの湖の霧晴れても涙のみかは山けし
右歌為勝
廿八番　霧中鹿
左 持　女房
限ある花のおもかげ秋の夜のくらきにしてそはさへおしへて
右　無名内侍

契りしはおなし宇治のよ半の月なれやこの宮にたちとまる
たゝ大臣の指南かなしかね

廿九番

左　親経

あはれしる都をこふる神のよしあらはれてそをつたふしめ雲

右　勝　行能

小篠原かり旅の床の山風にさえたる契哀なくつゝ

さしたる事なし宮人を難し仍右の勝

卅番

左　勝　実氏

忘れしといひて末の枕のかりにしふしてそあふ寸あかぬ浮世

右　為衡

猿の声ふるき嵐に煙をへたてゝ涙のこほるゝは我身なりけり
右手にもつらぬるよしとて左の勝

卅一番

左　勝　経通

鶴なきつらぬる行方の雲のこゑそ神代のことはり

右　公家

さしあたり神の宮居はいまの床の山風
右半後成ての袂よいくよの世しおもひて

左をとる勝

卅二番

左　保季

都をはやまてし出て猿の声いくあさつゆの哀かりつゝまし

右　勝　　康光

思ひねの草の枕の夢路にもわかれてのこる人のおもかけ

右哥も殊勝なりとて為勝

廿三番

左　持　　頼言

うつろはぬ松の花も色やかさなる山桜しきえつ〳〵

右　　行実

をのつから花ゆく月はかくれぬ雲はやかれの夕くれの空

左右共其指事なる持

廿四番

左　　經道

思ひあまる人の色をきまさる草の枕の露をまくらしつ

右　勝　　範宗

ほす袖よ出るいつの杜よくもなれはなえの露にもしめる数々

右もよろしく詞優なりとて為勝

廿五番

左　勝　　資隆

草枕むすふ人もなし大方なる人のあまる袖の上の露

右　　雅清

いく夜結ひても寝覚の夜ゝの草枕露とおもへは袖の露

右哥草枕きのふしもなしとて左為勝

廿六番

左　　家直

東路の末のいつしかぬれて夜はあさ露へても枕とる色の夕山

右勝　能基

まかこの山の夜まなかの枕にはかくこそいくたひもきくらん

左歌やさしく右歌勝とて右の勝

廿七番　海邊立

左持　女房

浦人のうらよ風見る旅ねにしもしらせいりもひさし

右　範宗

あさし海やうきまの浦の月見てし旅ねよ風みえて袖しほるらん

左右無指事とて為持

廿八番

左持　実氏

拷縄かゝつこの浦の三見かさ夜嵐に[illegible]

右　康光

よる浪はいさなとりめの秋しもや今もぬれまとくらん

左右共に何儀しきこゝろの為持

廿九番

左持　頼通

浦の月は袖ちかくて涼しいふ海あまさ塩くむしあま浦風のなかきらん

右　兵衛内侍

またへてよ秋もあくまの浦かみるを波まにはなの浦風の[illegible]

さらに無其難しこゝろの為持

三十番

左　保季

塩たれし袖のふちの数なる浦あさ風のかけもつたはらる

右　勝　　　　　　雅清

よる浪ハこゝろあるらし伊勢の海や塩ひのかたハ風もつゝなし

左ハ風まさりあへりのよし為勝

四十一番

左　持　　　　　　經範

吹すさむあらしのかよひ路ハなかなかつりのあまもあらしそ

右　　　　　　　　信實

いせの海のあまのたく縄くりかへし浪のおとにハかゝるものかき

ともにさせる事なしとて為持

四十二番

左　持　　　　　　家宣

かゝみ山よそに波こそうつるともまてしつかなる月のかけかな

右　　　　　　　　知家

きよみかたあけゆく月の影まよふ浪にしほしる舟のほそ道

させる事なしとて為持

四十三番

左　持　　　　　　資隆

立かへりつきせぬ海にて鏡なす浪のかけこそ絶やらぬかな

右　　　　　　　　能基

よせてくる浪のしら浪かけて海のあまのたくやの煙のかけ

ともにさせるふしなしとて為持

四十四番

左　勝　　　　　　經高

をとにきく海のあまをとめかけてのこしやみん

左　　　　　　　　行能

思やるこゝろやいつこ白浜のうらからくの夢をたに浜

うらまくかくしもてたえぬ

四十五番

右　　　　　　　　雅経

忘るゝ思ひしとられいつとえも海士をやの枕せの袖

左　勝　　　　　　家衡

いつくしいく我あしの海浜し塩くむあまれ独ゆるらん

たゆむとこゝろもしよりてかみ為績

歌合　建保四年八月十四日當座

題　夕草花　古寺月　寒山鷹

寄雨恋　寄石恋　寄夢恋

作者

左

女房　　經高朝臣

家宣朝臣　　行能

信實　　資隆

若康光

右

家衡卿　　雅清朝臣

保季朝臣　　知家朝臣

範基朝臣　　範宗朝臣

兵衛内侍

海師　　知家朝臣

衆儀判　　隱名如恒

一番 夕草花

左 勝 女房

こし海のや夕露おりく風に伴浪のかくされ花薄の袖

右 前權僧正

旅人のわかれ野辺の女郎花もあくれなちく秋の夕暮

左も其浪くも指難 右の歌の志をのみならまさ
はつくや 仍為勝

二番

左 勝 經高

宮城野や夕露なりく風に吹まよふさ萩の色

右 家衡

さそしられはしあらしやうつろふ夕露かけて萩の花ちる

右哥其句首尾不叶の左為勝

三番

左 持 家宣

山をよき夕露のおきもしやかさねて風しもあきのやせん

右 範基

日暮ぬともあるれ秋のよ露もかたくあるしかるめぐりも

さるはすも指事の為持

四番

左 勝 行能

夕されはのべにかねて萩すく風はいつもあられなりけり

右 保季

草むらの野べのお花をとりもの風のつゆにはさらしかりる

左の歌有其興仍為勝

五番

左　勝　　信実

露ならぬなみたも袖にこほれけり萩のうは葉の秋風そふく

右　　知家

夕暮の思ひ入野の萩の花衣のうつりと袖にこほるゝ

まさる方なきにや仍為勝

六番

左　勝　　資隆

咲まじる萩の花の色をしるへにやさきゆくの野への秋かせ

右　　雅経

夕暮の思ひ入野の露の下にみたるゝ萩かもとあり

左の歌頗うちあらきの為勝

七番

左　　康光

とまりぬとこゝろある野への秋風におもひ出ぬる袖のしつくに

右　勝　　能定

花薄袖にまねく野の秋風に野辺の方をもまねくは夕暮

右の歌袖かへさけり心の句得所のゆゑ勝

八番　右当月

左　　康光

さよふけて月をまちてよるのゝつゆのしけきかな

右　勝　　無名仍

まつ月をくもりなき夜のしらつゆの袖のうへにやとりけるかな

右為勝

九番
左 勝　資隆
よもすから山おろししふくゆふ嵐の峰もはらはぬ秋の夜の月
右　範基
あれはてし野寺の月のひかりこそかはらぬあとて月そすむらん
右為勝

十番
左 勝　信実
よもすから山嵐の秋風のふきあらしあれはとは秋とさゆる夜の月
右　保季
ねやふけて光ありしまつはとこさき浦やこのさくらしの小伯州月

左方秋ふけてのよのあはれことなりしゆかれぬ勝

十一番
左 持　行能
人ならぬ野辺なれともさひしさよ秋ふけゆくの枕しくれ月影
右　家衡
はれなつの野辺の鏡は若くさのうへにしもむすふ月の影しきませて
両首共に善手の為持

十二番
左 持　家宣
雲の多そ嵐山のふもとの須磨浦月の夜かけの鏡ひかりきよくん
右　雅経
須磨山おろし秋風のみにさそはれつかはりくる月とのこりの月

左大臣於摂津中山亭歌合

十三番

左　　経高

泊瀬山月のしらむしのゝめにあけまくつらき鐘の音かな

右勝　　知家

背とたれの山のはふかく暁とくらるゝに月けり

かすあけまくきよらしきころと云の歌は秀逸

やのかた勝

十四番

左　　女房

をく川や稲葉の月はかれなりけり入逢の鐘の秋風そふく

右勝　　範宗

泊瀬山ちかき寺のかねのおとはよるにまさるや秋のあらしに

右の歌は尋常にて右の為勝

十五番　寒山居

左勝　　女房

山里の山の木の葉やちりぬらん嵐にちらる

右　　知家

鳴りの後を川ちる山風しおちらぬ秋のくれ

左歌は景気の為勝

十六番

左持　　経高

あけはにもしらぬ雲のはたて嵐にきこゆ

右　　雅清

風さむくやとる嵐の山の紫葉ちりとえぬらん
右方無指難仍為勝
十七番
左勝 家宣
山さとはきゝしにあらしのみなりしに稲葉のそよくかりの一行
右 能基
冬しの嵐とひきてゆく雁のつらさの霜としほるゝ
右方寒山あまり可ひとつしき歟又右方と
おしの為勝
十八番
左勝 行能
暮れぬる山の松風やさむきつきさ月と霜しまさて
右 兵衛内侍
むら雲のはれゆく秋の夜寒ふくさむき山のはの月
右又無指難仍為勝
十九番
左持 信実
よそにのみへ霧にきえゆく山風や激やあきの秋の夜さむ
右 能宗
嵯峨山よそよそつ霧のあさ嵐暮れの鳴くこゑきけ
以左為持
廿番
左持 資隆
津山深やきれゆく月のおもかげてらの羽風さ夜さむ風

右　　　　保季

山かせのさえしはしるやいはかねにかよひておつるたきの浪も

左哥猶まさるにや侍

廿一番

左　持　　康光

伊勢の山かけゆく月しろし鳥の翅しりつゝ秋の初霜

右　　　　家衡

あはれにやさよのはしひとりかりねのさむしき山の夜かりね

左のうちきおもむきなし　右又あまりきこえす

させる難なし　仍為持

廿二番　寄雨述懐

左　　　　康光

たつねこし昔のみちもあまそゝく道の末にや

右　勝　　家衡

大かたの雨とおもへと袖の上を人のよそにやみし

左哥詞難也仍右勝

廿三番

左　持　　資隆

いつしかと麻のあさやにしきかへし神なつきひやすさひ

右　　　　雅清

思あまりいはてつる雨の夜にぬれてすめる袖哉

為持

廿四番

左　持　　信実

をしかあつまる霧ハ袖にまてきすゝしほにこゆる庭の面まて

右　　有家

ほしさにいつくはしらぬしらつゆのをきそふ袖の村雨

為持

廿五番

左　勝　　行能

あきはなほくもりなき室の秋の月霧ハさりけり袖の色に

右　　保季

きりふかき野の庭まつかけしらへしむ庭やいかにふかゝらん

左勝まさりたるに

廿六番

左　勝　　家宣

むかし寄る浪の霧のあふさてく志けし浪まに人あつまる

右　　範基

ひくはりもさそて浜あしの浦にとまりしたまを
たのみの七夕きゝよりしひなたのとかにとかれ

まさりよろし

廿七番

左　持　　経高

心すむ山のはしくまとかくさてきよき月の秋の空

右　　範宗

さても秋のよそのむ月まつ人まちし月そ送しき

あそひの持

廿八番

左 勝　　女房

大方のあさにはきそはれて新枕の夜の梅のにほひ哉

右　　無染門院

面影はけふ我身はさても久堅の雲ゐのあまのはしたかき

こゝろの詞艶しきこえ侍りなむ為勝

廿九番　寄石恋

左 勝　　女房

君なれや袂の涙の色のうへにしもせくかひなけてそなる

右　　雅宗

むかしいは涙にうかふ我なるをおなしなからのあはぬとこのすゑ

右歌も宜しくしとこのあはれ涙からまさる

歌可謂秀逸の為勝

卅番

左　　隆房

逢ことはよしなくとも其の昔はさてもつれなき人

右　　雅清

人しれぬ夜のまの石の下にすくなくやそうしきん

為持

卅一番

左　　家宣

我のみやいくらつ涙のかしきりなくゝゝけてもつきに晴るゝ

右　　雅基

わか袖は涙しらるふきさへなほそかに我のこやさへしめん

たゝいくら涙にまかせのこと侍らはさうと

のおもひをよりふりたるゝさらぬひかりもなかれぬ世のこと
よふりしほとゝいふもしもよのおもしに書蒲く

卅二番

左 勝　　行能

ぬれはゝいとしきつむ岡れ石のいつあしかれん契ともはし

右　　兵衛内侍

年よりの涙もつゐされいかのとしよりぬる袖の乱れつゝ
右方申云ところ歌の下句た偽りものゝ勝

卅三番

左　　信実

石はしへ流ははるゝつれきこえてうらさてとれいてらるしき

右 勝　　家衡

渓川ふかれいまさつむかしいくらぬたのしいとさものかはふ
右方申云銀無難右歌ますされいのの勝

卅四番

左 持　　資隆

年よりもまけしらはさくら花れ春とふくしいつきまし

右　　保季

まてしらやたのしよるれ契りかいさしてやさらむしくあのみ持
右方申云不足とらく

卅五番

左 持　　康光

むかしとくめとうえしぬけしぬうけゝれとかいせくひをさき

右　　ちつか

あしたには海よりたちける風にあらそひ浪にいくよあらそふ
右首勝なくのよしに申 宗慶

卅六番

左 勝 康光

我世ハあしたの事に出でし人をこそまて夏ふる月

右 知家

あけきぬとひかぬよりの月日かて夏はふるやまかけ
太なりといふなるしたかたやまへの
白あしもやとかすにはしとりてけり

卅七番

左 若濃

たのかつしきしもしくれるやまかきおもひつゝもとのまゝかな

右 勝 保季

渡川いよ劉はなつまてすゝみすゝしきはるの夏のうきかし
宗卿ますかれ

卅八番

左 信実

まつらしきあさしまにゆきさしめかやへともの枕よ

右 勝 家衡

あらしは世のならひきすかれてにむすふ人とさらにゆ
太宗のゆめさや

卅九番

左 勝 行能

むかしも夢をたゝ人をさのみのうきあくかるゝしきたえ

右　　　　　　　　　笠朝臣仍経

逢ことハ見しよのゆめの中にのミなけきつゝもかなしかりける

右歌為勝

四十番

左　勝　　　　　　　忠岑

おもひねにやまひハまくらにしるきなれや

右　　　　　　　　　能基

あさけの月ハ人の面影ハ夢にもつきすしのゝめ

左歌ハ得意の左為勝

四十一番

左　持　　　　　　　頼之

夢にてもありしよの面影ひとりねの月の袖かな

右　　　　　　　　　雅清

うつゝにハ逢見しいつかたまくらの夢のうちにもしられけり

右歌の躰無左右又悪言なしの為持

四十二番

左　勝　　　　　　　女房

三吉野の深き山の奥の雲ゐのやまかけの袖のひまもなし

右　　　　　　　　　能宗

秋ちかくなりゆく道のほとりにも夜の月のうつりけるかな

此番左為勝已決まさりハ左歌の卿得持勝なる

勝

内裏歌合
建保四年八月　当座四十二番（八月廿四日）二冊在圖書寮

歌合　部中
九條公爵家旧藏本也
昭和四年大呂晦
岸迺舎